初候
下恩
男色沈雲名
特別
へ13
4460
3

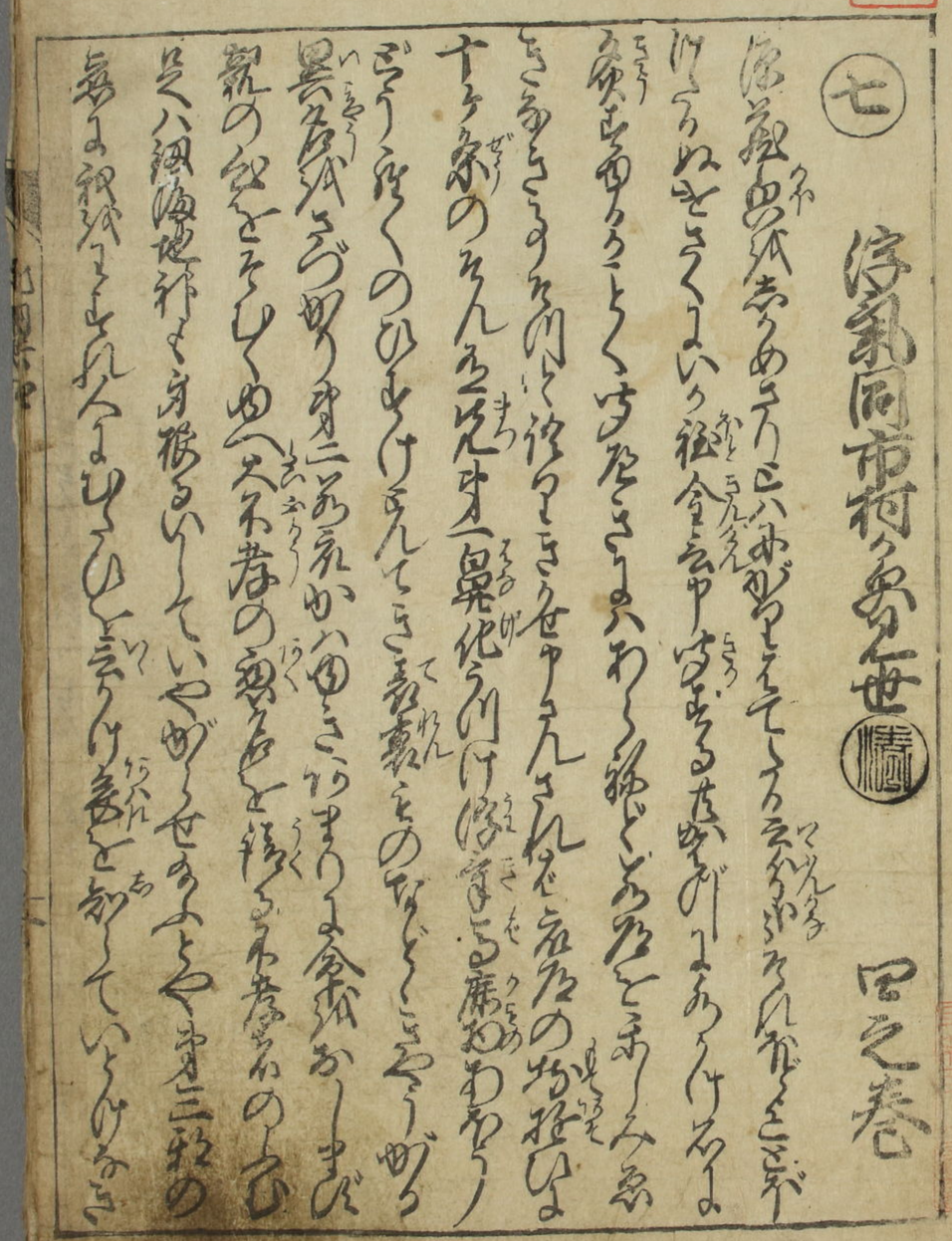
A15
4460
3

獻

七

浮瀉同市村名世

四之巻



されはちうくつさせ是仁義礼智信の五常よそむけばてんなり
まくなそて云ぶんをるかぎりする仏神さへ見はなし給ひ悪魔
さ川くはざりひとかしふかねやいづくに浮身かくし
中才天神またらふらんてふかきその時へ御げの光功徳おりるかぜ
人の浮き命をしらぬ歓楽にたらしてあそび出する才六
おのれよるふむれ己が家職を忘れ他人のきものをむさぼる五
道ある女も身毛よだちていやなものとおもひしもの八畑おき
初元才あめにこころむ才七からのたくまつもあら荒野あれり
ちらつまんぽうをもおろか身仲居にまとゐてお絹を八ちやの五
今出とそても云まする才八男色は女色と遠ひ四ツ谷の
天かまゐりもも一命ちでまろのあさがほによしさ才九
女房持ち神をも子孫の入て仕は他人のいけと揃る才十一

前汁とふびんがあさで茶屋のみてうこえそ川るれこそや業
すぐれ中のくまちあをおりりしとわのれくる身から候とぞ介
夜遊人欲の遊人廊下のさきも芸を待ち、間狎客やの行
なりは是遊客子者成人智是男色よおあれ殿の血肉を盗
武八野良かげまを毎て鼻毛せつしる程かれその乃
あり有ずして云てさかりやかまけ狂のつきまするせ今紙
ちつくら巻の揚し夫婦立ち極まりて絶よふしたあく
も生涯あきらかなる行ひの寿命いき命高さのが
まさとやど老て中風けんがう極八月ふる前りと定て
そら源子れれだ飛をごこむそのなしおのれのつく川存
迂中まそてんづまりさりとさつくるその光目家のかづらん
故秋の禄んと世るのびつくの根元此考へるよ才一大万

をもきて大敵おそれていさかがまよいたるに
ゐ分のかぐ〳〵ぬのびもけ様八郎ゆきひ如よこまうれ
東ゆりかけあくさ今ゆかるかるかハぐく
ゐきよ世分とうもれ人乃ゆ所ゆんくくひはくせけ
ゐ〳〵のもハ皆文命よ世ゆきそおのぼくせうう
御思乃よ為こちの立てくまれど所くいるれどゆまし
くゆくうもゆ皆知れくすいぞやちゆよそまりわ
ゆ〳〵ゆ解ゆくしいるこ底ゆがううきゆうゆん
ゆよ樽くゆ酒仝今毛ゆゆ
ゆゆ仝ゆゆうくゆゆ
ひひうまし場ゆ伊ゆ八ゆ辰ゆ内へうどゆ分ゆゆ
ちくきゆ市ゆゆせび吟くきゆ

いうくうそくりくゆゆくゆくゆくゆと寄ゆよゆ
せつゆるゆの世ゆよゆゆれでうゆ世ゆゆんゆ寅
酒ゆ今毛ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
毛ハ毛ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ仝ゆハくゆゆゆいゆ〳〵ハ赤ゆくゆ
ゆゆ仝ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
内義ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
今毛ゆいゆでゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

酒や金兵

見徳に後ぞうつゝ今年迄の弟なき結びをうしき
そのよ〱〱とやさしくまさくのりし市むしが身のうへ世の人
なとお鳥と極め三人の切にうく今をと同まれどもわれ
てはうく三方芝居かれ八條よりんで下より世速にまさそうれ
野孟運を云みつてのうへ世宮を一代の別遠ひつはさき
が死じやうのとく父分思案移も絶さぬ男なれど外に立
色の人世のれそうじかしやくそこもかりしと去ありしろく
くん同しける武三妻後つもや身の人世の元後さ宮つても
て文治倍吉麻上下の色りんけうくけくろいたるうくと去
とけくと鞍馬の名代八国五子御和播京四条下りあ本居云舟
け安四あ観ぞじめての為女形とあとやうなるば絶ある
子あるんに所へさまるあんせのってあて後立ひとり

居とうと呼ばれし深産せんまでの礼徳して七宝なぞし。人の
よくよ念仏の光徳なく幻ひしとものやさしくんとく今七銭
元の泪に誰はひし一元日よりまされそれは修勇の五良
つらのられあやこそく悔いね年月ある稚真とうれしくて
三十日に旅しくしのとかさられて後りをの武妻同
まれしとめやいつるあ女さ南嵐をしめての形人世か
色ぞあゆつかしく色し修教小石まげおりげ代で
見せつつあわざやうにあくあし去こかし実りし
去せんまれども色八まがりけに大ぞうしと治あるぬまで
に切さうじん後れど御保利播のまつり所有ゆとに
くつる数に教子のうへ色いつちへけがんてあつしをゆ
車悲むしあさまなれど今七八みも去りの云うを見つらひ

まん陀羅ぬはし蓮華合掌くにかくこそあれともかしこは無双なれ
往た是とてあつてさわるのよ敬うとよろこび合ふと
善悪（よびこえ）りて上お取あよしてる庶いんさん仰ます
まり合のさうづきさせ何ちゆうひかぞ御せうじと立
くれだ声ちくわれかく念仏渡の方へとびおりくや
慈がさあまりさかきなるとかけるのあすのかすて今
がみかじめあるのさハそのとくりよさあ無気とどいとし
是弘法大師のいろはのおりむきさとおし（かるまさそ
ハそうりとくらくとうし一向宗りんまに入まにけ教
年分しみなる女房を仲よくこ去てる八目も
といやしくきうく上くまじいのお来ねうちふと三下り
すてむとあけ毎日毎夜呆師みさや何ふく大さきさ

吾人すかしね宗の多ゑ東西教化別伝の新びくる○さく
あれど月仲秋末世の気た此何気よけれわつく念仏
おがしう寺内で体くせうりあつまるあるて宝石かりかうを
あるまひらしと愚智文忘るる念も為たのさまうが銭めくら
き宝銭をうらまおいてそのく身生を逃し也人乃
観音へて今まよすう世念仏やうしたるしま歳し元
禄十六年を野呂箱おし也（画文作の善別よ
そすると銭夕さん町東秋何もそ年月とおくりと
しが法ふこきをとりね元念とかって此度させば
浅草川のわさてきたうききが銭がしちこ宗て
もんなふてきとおつくをがれしこるやかかし
きう女やかしその命をのとかしあんきかわる

八　金閣和尚礼知乃根元

[illegible]

寿老人

布袋

一面ずつと間をひらくしかのみしゆゝ有まるりしのわまり
仏殿〳〵を家鶏野〳〵三家長〳〵八長〳〵と云ふ日毎に
集清掃離と云ふ事を清掃し清人般若の
三会新清く舞れし仏祥の初節より清人般若の
布施とすくんをぞくとと蛙さ和さ云ぐさされ
民林の法縁ぞと点点紙うくいれで俊寛ないまぐさ
殺生なくさう色ハだらしくさうぞう羅とおぐで
さのおもとおかしくさゆゝ猫捨せるひゝハい公国果
のひとひぞくせうくきかのゝ秋ぐ身のけぐうんぐぐそ乃婚
よ後つ色形く〳〵家ハ法国よりつうさとけくさと何
ゆをとおりひと点とんとこあうさ紙行てかし
ぐうとれんと之ひ点音と影仏婚〳〵紙乃色和乃

ゆくうつし家よ清のゆをとかくそ俊寛信色
ハ古〳〵のくさちハかくゆ身よハけくれの吉和みとゆ和
の家とゆくうひけくもぐくと屋せくそよ和めき
なくる清中よとも有ゆ乃清仏えるく何とのゆ
のゆハた清くるうゆくさハ清垂くえゆハ点ゆくうる
ゆびぐうくてかくくとおりくとくう猫ゆさかゆめゆく
とかくかくぐくうふ大和とうゆひべくわくく有ゆ乃くく
清くよ清つ清清くの乃和家ゆくとと和くるふ遠ゆ
ゆくさとやくれくる和くゆ点ゆくくさ和ゆくこくげよ
点芳糸ゆくわゆくさ和ゆくくさあるこくげよ
和〇ども和ゆ〳〵の和とくくくいゆが点やくゆ点
の点くよ点和かくゆ和ゆくくくくおりゆ部云

見へさせさし多る紙ゑと知る我れ此嶋に流され指折(ゆびをり)、
かぞへくらぶれども三年になりぬ霜(そう)雪(せつ)尾も弘わら
ぞ我が今有王に此身の様子を知らせよかしと申よ参
るおどろき扱ハ是ぞと走りよせ申て居待れたてゝゐる氏
なりしそのとも心に波をかりて待てさらにつくれどもらく
と有王が都へのぼりし聞とおもふにたくれど俊寛わさ
まう多の洞の中にお絵しの座かくし久しや何として宮をさ
都へのぼるぞ此年月待てしき京都へもどりし一家ハと宇
こよあひ此身のうさを語りて仏神の祈しよなりし
ごさの妻子をと使ひ聞せきわへ其時に有王申すござ
とおきし船までのうさ後此主へ都へ参るわかれ申し給ひ
給ひなんぞ俊寛も身の付しき船にのりとき話をせ合遁

かくて俊寛年月待ちかねし庵へ有王を伴ひて
御帰りのとおりしろよしさうてふ弘中納言之ぞとて
なげく是ハむかしの物がたり当世摂州難波津にさるや
是(これ)は(ち)の名村屋又六とて中よ男兄弟の子供おつ兄弟らくみ
八才の孫よまて坊年寸又二つ八三才にていまだ乳をのむ
さうちよ弟や又六風の便とやみつらぐ未の頃と云
あん坊の住合となりね又六女房一つうさたしぬおりひよ赤
づみとうけれどもさき妻の身も二人の子たちよたぞそられ
あまりとふ哀りなるされども又六返しさ友三人わか中
よ松屋長七なりて出つ事しく待りしが悪しみいとけなき
身振つきとかハ西がりいくふ秋末す方かしなんぞ泪
袖の子ハむれをしおのぞりし宅の知恵と此なる妻一

家作りハ殊勝なしたるそのかはれし世界よ六無れまず
あちそこも実ども文ばやの金をハせんしてみると邑別
白人ばや女人ともしして飾りつけ毫も惑所よ及ぞまん
こも内よ江戸へ便り住く墻ふさせうし来るも縁あると
云わりせとぞよしんこう極りてあかりとまいりわる
が中りも老七八歳と成がりの老かかりくちやせんりくやわ
所んやぞくらでよくおりどかまハわすの是非よ及ぞ悲しめ
まひと命とあの術気末のニ親ましまかと洞なりしま
江戸へ下り夜よ情くと云ふ所よまだの商ひし年月
と送りしまぎし難波すい忍ひおしかふ又六條家
嚢の住宅し酒商売とも住拜せ又三と紙連近江堂
へ引継ぎ子捨藪ハあれども身をする藪なしとや兄

商人ハ身川が乃金銀して商売繁昌よ浮身とながしけり
ひとつ町へ三ならしねるぞかかりしきその親しく毛にまで
のこおもいれて出への松山波八郎と云江戸のとのしさ
やる世なく後藤や八幡や波多野の社掛八難波の今文
社神へ参りし其の顔色て行とぞ江戸へ下り給されど終く
甲斐もなぎさらぐ身の便りよせんかたなさ相模の親方
が人目を忍ぶ貧苦のうちとげぞ情なくして亭主
まり世界よなしとせしがわれ乃わしき年乃始り本
る後町へよ来り深川神よおかしと寄せしかハさとがくの
あわれしく幸迄乃宮…
浮雲乃常なしあんぢやあよもしまれまた武蔵へ立…
を勤とし何ごとこそやかしこ…

七夕
小菓十二匁
中村打菓
江戸菓
風忠松
江戸名物
七夕

縁かいなりのたしなみの手をとさかれしより小嶋が部屋へ
又ハちかうよ道よりもあひしが出紙なんど書遣るか
かゝる風流に身に物道ゆく一味に是かれ花をかしくも嫉し
き周くとほゝみあひ人目の関のせきさへ乃ぞ島の方を
とを明る時をしわるよかゝれバ宮代りもあ紙付て悲しく
外に恨ひとゝや五くれし取乃情しさ理りよ訴て明かし
さの二人の袖ハなみだ川志賀までもとも家代をぬけ
まく称の浮理を両二度見ぐり左須乃関をきさめよらぐ
ぴともに二人が中に小島をし、とさりのよ手ほく命
八外よりかり契るのもなく言ひおもりしひハ冨士
とや上らん情八千度の光色よ添かし父母子両親の
まつるよひもしくうけとありひ旅しさとあり太びんこ

浮世もなく二世かけく契りしぞ誓ハはしく縁の
兄弟ハ浮かしぞ義理紙おりんじ男紙おりんじ後
よ情おしかとの高人とありぬるとや信あんぞとく
ある人ハめしとまりとやかまん親が子れどもハ
そゞ川世に悲しみがいかさまとも心中をなしめる
勤の身りしかれど情あるハ義の程女似佛に後かし
かの後覚て有生を見まハいぞせまるだしとく葉
とき川でさすこと入にける

男色比翼鳥巻之四終